



そこへ、北^{きた}のほうから、まっ白^{しろ}なはねを、ひわひわとならしながら、
百羽^{ひゃっば}のツルが、とんできました。

百羽^{ひゃっば}のツルは、みんな、おなじはやさで、白^{しろ}いはねを、ひわひわと、
うごかしていました。くびをのばして、ゆっくりゆっくりと、
とんでいるのは、つかれているからでした。

なにせ、北^{きた}のはての、さびしいこおりの国^{くに}から、
ひるも夜^{よる}も、やすみなしにとびつづけてきたのです。

だが、ここまでくれば、ゆくさきは、もうすぐでした。

たのしんで、まちにまっていた、きれいなみずうみのほとりへ、
つくことができるのです。